

旬花報

21号

発行 2023.3.31
群馬県立女子大学
同窓会事務局

〒370-1193
佐波郡玉村町上之手 1395-1
TEL : 0270-65-8511
URL : <https://shiou-kai.com/>



同窓会長
野村 留美子

コロナ禍も三年が過ぎようとしています。同窓生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

この期間、同窓会でも様々な活動を断念せざるを得ませんでした。皆様との交流の場となる四年に一度の懇親会や大学祭での同窓会カフェ開催の中止、また幹事会での新幹事さんとの顔合わせも実現できなかったことを大変残念に思っています。コロナウイルスの影響が一刻も早くなくなり平穏な毎日が戻りますことを切に願います。

群馬県立女子大学では、二〇〇九年度に開設された文学部総合教養学科を母体として、二〇二三年四月一日、新たに「文化情報学科」が開設されます。

同窓会も多くの方々にご参加いただき、新しい風を吹き込んでくださることを期待しています。皆様の健康をお祈りしつつ、いつか懇親会や同窓会カフェの会場でお会いできる日を心待ちにしております。



紫桜賞

令和四年度の紫桜賞は、国文学科四年、出店桃葉さんに決定しました。

出店さんは、茶道裏千家淡交会総本部が主催する「第四十三回学校エッセイコンテスト」の学生の部で上位三名に与えられる優秀賞を受賞しました。出店さんは、「受賞作品は茶道部で地道にお稽古を積み重ねてきただけでなく日々の大学生活で文学に親しんでいたからこそ書けたもの」と感想を述べています。ここにその最高賞に輝いたエッセイ全文を掲載いたします。

第四十三回学校エッセイコンテスト

優秀賞受賞

深海の先輩

出店 桃葉

あこがれの先輩がいた。先輩は柄杓の扱いがとても美しかったが、私より二つ年上だったので私が三年生に上がるときに大学を卒業してしまった。先輩の卒業から、もう一年になる。

高校で茶道部に入っていた私は大学でも迷わず茶道部に入部したが、タイミングが悪かったのか、私の代には私以外の新入部員がいなかった。そのまま一年が経ち、新型コロナウイルス

感染症が蔓延した。ほとんどのサークル活動が禁止されて、茶道部に新入生はまたしても入らなかった。私はまるまる二年間、たった一人の新入生だった。

コロナ禍が続くに続き、今年で三年目になる。すべての先輩が卒業し、私は四年生になり、茶道部には四人の新入生が入った。熱心な先輩たちとお稽古をするのはとても楽しいが、お点前をしていると無性に先輩のことを思い出す。

冬の寒い日、先輩が炉のお点前をしていた。私はお客を務めており、一番近くで先輩の動きをじっと見ていた。先輩の柄杓が音もなく水指しに差し入れられ、深く一杯の水を汲む。先生は「お釜は底から、水指しは中ほどから汲むように」とおっしゃって、先輩もそのようにしているのだが、その動きがあまりに静かで優雅なのでまるで深海から氷水を汲んできたように見える。ほんの数秒の柄杓の動きに、重く唸る氷山や、海原を吹きわたる広い風のような、とても大きなものを感じてしまうのだ。先輩のお点前は何もかもがそんなふうで、私はお客様をしているあいだずっと水の中にいるような深い沈黙を感じていた。こんなふうになりたいとずっとずっと思っていた。

今でもお稽古をしていてその光景を思い出ししてしまうのは、きっとそれを知る人がもう私しかないからだろう。先輩は卒業し、同級生はおらず、後輩たちはその先輩に会ったことがない。私が目指しているものを誰も知らない。それがもどかしくてさみしい。角田光代著『私たちに物語がある』という本に「垣間見た奇跡を、忠実に再現し伝える義務が、信仰者にはある」という一節があるが、私はまさしくそうだと思う。私の見たあのお点前を、私はもう一度みんなに見せなければいけない。先輩のようなお点前をしなければ。

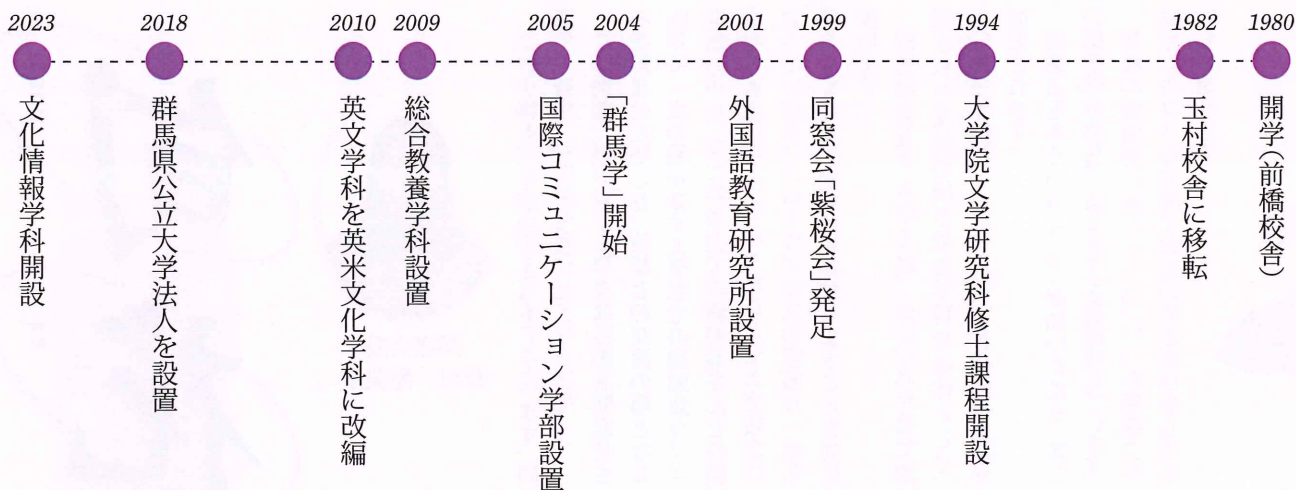
そうしてお稽古に励んでいると、ふと茶道とは誰にとってもそのようなものではないかと思った。

お点前をしているあいだ、お客様の前には自分しかいない。手順を間違えてもチームメイトにフオーをを求めることはできず、範を示してくれる先輩も先生もいまはお客様をしている。この瞬間私は私だけで彼らにお茶を振る舞わなければならない。頼りにできるのは心に浮かべる理想の姿だけ……。それはとても心細いことだが、そういった孤独の中にあつてこそ私たちは「ああなりたい」と思い出し、自分を奮い立たせられるのではないか。私だけではない、先輩にとっても、誰にとってもお点前の時間とは孤独で、だからこそ憧れを灯台にして、まっすぐに目指せるのだろう。その純粹さはとても気高いことのように私には思える。

最近先輩が住まいの近くの茶道教室に通い始めたこと先生に聞いた。先輩は今でも柄杓を構えているのだ。先輩がずっと私の前を走っていてくれることが嬉しく、あの見惚れる手付きでお点前を披露しているのを想像すると自分のことのように誇らしく思える。今、私の夢は二つある。ひとつは先輩のようになること。そしてもうひとつは、ずっと茶道を続けて、もつともつと所作を洗練して、いつかお正客さんの先輩に私のお点前を、私の海を見てもらうことだ。



群馬県立女子大学の歩み



開学から四十年以上経ち、開学当初を知る先生方も減ってしまいました。そこで今回は、同窓会役員に学生の頃の思い出を振り返ってもらい、学生の目から見た県女の歴史をひも解いてみたいと思います。

開学当時は学生主催の社交ダンスパーティがよく開催されていました。大学祭ではわが創作ダンス部も文京キャンパスの体育館でダンスパーティを主催しました。前々から社交ダンスの男女両方のパートを練習し、県女生に講習会も開き、当日、部員は白シャツ・黒パンツ姿の男性役で、尻込みしている県女生と踊りました。

(一九八〇年入学)

大学祭のときホールで行われたのど自慢大会がありました。部活の仲間や仲良しグループとチームを組んでパフォーマンスを披露したのを覚えています。

(一九八四年入学)

学祭のコンサート終了後、コンサートスタッフを実行委員の車何台かで高崎駅まで送っていました。役員だった私も車を出すことになりました。

道中、「女子大生はスキーに行くのか」とか「合コンやるのか」といった話を振られたけれど、田舎の女子大生だった私には、今ひとつ刺さらず、盛り上がりませんでした。

(一九八四年入学)

学祭の思い出

バドのサークルで焼きまんじゅうの模擬店を出したり、実行委員として宣伝活動で高崎市内でチラシ配りをしたりと初めての体験でワクワクしました。

(一九八四年入学)

実技棟ができたとき陶芸教室の窯を自分たちで造ったことです。

モルタルこねて、煉瓦積んで、焼き物、ちゃんと焼けて感動しました。

三十年以上経つけど…。さすがにもう使っていないだろうな。

(一九八八年入学)

編集後記

コロナの流行から早三年。ようやく収束のきざしが見えてきました。

同窓会役員からのアンケートでは、学園祭にまつわる思い出がたくさん出てきました。大学ならではのイベントができづらいい日々が続きましたが、少しずつ戻ってきてくれるといいなと思います。

コロナ後の大学生活がどのように変わっていくのかまだ未知数ですが、学生の皆さんには、充実した大学生活を送ってほしいです。